

漢語の形成についての一考察

——「じょうだん」考——

和田 潔

言語を文字という媒体によって享受する時、その文字の現れる姿や形——広く考えれば文字の意匠や様式を含め、又、日本語においては、仮名、片仮名、漢字など——その姿形の意義を考慮にいれて、文字に盛り込まれた情報を深く理解することは少ない。それは文字が如何なる姿をとっていても、言語機能の中核となる、意味伝達の機能は充足されると考えるからであろう。しかし、文字の姿形が、単純に意味を伝達するのは別のコードで、情報を提供する場合もある。同一の文において比較されるころの文字の大きさをも、文字の姿や形とするならば、二行に割って書く、本文に対し二分の一の割注の文字の大きさは、それが他ならぬ注であって本文からは逸れることを示す。また、いわゆる宣命書きの表記体の漢字の大書きと仮名の小書きにおける文字とその大小にも、その意義が認められるところである。これらは、書記の行為に、既にその意図を有するものと思われるが、また別に、文字を書記する時点では意図的な行為でなくとも、観察的な態度をもってすれば、さらなる情

報を享受しうる場合もあるのではないか。意味伝達が全うされ難い状況において、殊に、漢字の知識量や文字表記のシステムの相違など、言語上に障害を伴うことが多い過去の文献について観察しようとする際に、文字の姿形が、語の理解に對して、どの程度示唆的であるのか、換言すれば、表記が言語に齎す意味について、文字表記の研究の課題として、考えてみたい。

ここでは、文や文章の表記体については、一切省いて、漢語の表記についてのみ考えてみることにする。現代、我々は、漢語を書くにあたり、何等の問題もなく、漢字によって書く、という暗黙の原則に従っている。常用漢字の制約のなかで、部分的に漢字で書き記せない場合でも、全体を仮名書きに統一することはしないで、可能な限り漢字を用いることは、この原則の働き具合を示すであろう。しかし、過去の文献の中の状況は、現代のような規範の意識はないのだから、ある一語についても表記の様相は多様で、語によってはその語の特質を示すような意味を、表記が持つこともあるだら

う。

さて、以上の構想の下に、「じょうだん」(以下、表記について論ずるにあたり、具体的な表記を伴わないものとして、この表記を使う。アルファベットや発音記号によってもよいところである。)

と云う漢語を引き出して、具体的な調査の報告に移る。或いは、この語の説明を漢語としたのは不都合のあることかもしれないが、和語に対する、広義の意味での漢語、例えば、『大言海』に、「じょうだん」を求めると、見出し語の活字の用い方は平仮名の細字によって掲出し、「此活字ナルハ漢語(字ノ音ノ語)ナリ」(索引指南)とすることが分類での漢語として、話を進めることにする。(なお、『大言海』は、他に、平仮名の太字で和語、片仮名によって唐音及び外来語の別を示す。)

この漢語の「じょうだん」を現代の表記の通念に従って書くとなると、太宰治の幾つかの作品(80頁参照：資料I 明治以降近代文学作品に見る「じょうだん」)に共通している用字「九談」を取るのであろう。太宰が現代と同じ規範で、この字列を専らに用いたと判断することは誤認であるが、現代の規範とは別に、この用字の定着の実況が伺い知れる。時代を少し溯って、明治から昭和の初めにかけての状況を観ると、様相をかなり異にする。狭く限られた文学という範囲で、少数の作家の作品に見るだけでも、一人の作家の、同一作品の中にさえ、異なる複数の表記が視野に入る。一個人の文字表記についての素養——漢字に限って言うのなら一個人の漢字彙——や、作品内容と文字選択との関連については、別の調査の方法

を取る必要を認めるので、一述述べない。また、いちいちの用例の文脈上の相違についても、細かに述べる暇がないので省略に従う。

問題にしたいことは、「むだなはなし、ふざけたはなし」という意味を表す「じょうだん」を漢字で表記する時に、使用された時代(明治から昭和初頭まで)と使用した人の個性(パーソナリティー)を度外視して俯瞰すると、かなりの広がりを持つことである。そして、この点をこそ、取り上げて言及する必要があることである。それは、文字表記の研究課題として、ある語に対応する表記を個別的に、且、通時的に記述することが考えられるが、実況調査に基づいた、語の表記のヴァリエーションを簡便に目踏できる報告がなされていないからである。つまり、例えば、清濁の歴史的な変遷についての記事を備える現行の国語辞典を見ても、表記についての変遷の説明を施すものはなく、付された漢字表記も常用漢字による表記か一般的と思われる(但し、一般的である保証はない)用字の一二を示すにとどまるのである。

かくなる現代において、矮小化された、文字表記の知識によって、過去の文字表記の展開の実況を観察しようとする、そこにはかなりの抵抗が存在するはずである。自らの知識に求めない特異と思える表記は、他の語との関渉がない場合、自らの知識の中に対応関係を求めて、——字典辞典の中に求めても結果は大同小異であるろうが、——集約的に語の同定を行ってしまう。加えて、同じ作家、若しくは同じ作品の中に、同じ表記が繰り返して視野に入る時は、現れた表記と自己の知識と間に安定を伴う結び付きすら生まれ

るのであろう。

例えば、漱石の『彼岸過迄』の、全体からするとまだ書出しに近
い、「風呂の後七」に「雑談」という字列がある。

「さうですね。遣つた後で考へると、みんな面白いし、又みんな話らないし、自分ぢや一寸見分がつかないんだが。——全体愉快つてえのは、その、女気のある方を指すんですか」

「さう云ふ訳でもないんですが、有つたつて差支ありません」
「なんて、実は其方の方が聞きたいんでせう。——然し雑談抜きでね。田川さん。面白い面白くないは倍置いて、あれ程呑気な生活は世界に又となからうといふ奴を遣つた覚があるんですよ。そいつを一つ話しませうか。御茶受けの代りに」

『漱石全集』第七卷（岩波書店・一九九四年）

現在刊行中の漱石全集（岩波書店）では、編集部が補うルビは「〔 〕」で括り、漱石の手による原稿のルビと区別するが、この語に、「じょうだん」と編集部によるルビが附され、また別に、注解を、次のように施す。

原稿にルビはなく、初出のルビは「ぎつだん」、初版で「冗談」となる。

（初出は『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』、初版は大正元年、春陽堂からの単行本を指す、と後記にある。なお、編

集部による本文校訂及びルビと、注解とは互いに干渉しないとのことである。）

注解に示された内容は、後述するが、注解が付されたこと自体について考えると、同じ漱石全集の『ころ』で、五カ所に掲出する「笑談（本全集の編集部が附したルビに従えば「じょうだん」）について注を示していない。注解に對する方針は、全集の巻毎の注解者によつて、幾分の違いがあるだろう。その点に関して論おうというのではない。ただ、『ころ』に見える「笑談」について、一方に、ヘボンの『和英語林集成』などにも登録のある「笑談（せうだん）」という語の存在を対峙させることなく、注解者の意識の中で、本文に見える「笑談」に對し「冗談」を即応させて理解したためであらうか、この語に對して注意を促すことがない。編集部のルビについても同断の結果であらうか。いづれも、全くの臆断の域を出ないのではあるが、それに対して、『彼岸過迄』の「雑談（じょうだん）」（これも編集部のルビに従う）は、「雑談（ぎつだん）」との対立が、注解者を含め、現代人の語彙の中で自と起こりうるから、この語の理解（表記を含めて）に抵抗を感じる。つまり、原稿の、ルビのない「雑談」の漢字の連結を、「ぎつだん」と訓むには、この行文の内容にそぐわないために、「じょうだん」の意と捕らえ直すか、表記の面で、不都合が生ずる。分析的に考えれば、この様な過程が読者の中で行われる。「雑談」について、既に同時代においても、同じ判断が行われていたことは初出後との校異によつて知れる

ところである。(この稿をものした後、視野に入ったが、同じ『漱石全集』第二巻の「琴のそら音」に、「雑談事」があつて、編集部のルビは「じょうだんごと」、注解は示さない。)

初出の『朝日新聞』に見る「雑談(ざつだん)」との関渉も考慮すべきであるが、ここではおいて、資料Ⅰに限って見た近代の文学作品の中でも異質と思える「雑談」を「じょうだん」と読む証として、「じょうだん」の表記に「雑」と「談」の字列の登録があることを、別の資料に求めておく。

明治三十八年の『新編普通辞典』(森貞治郎 山岡熊二)は、凡例に

一、此の字書の特徴は、最新の熟語を収め、高尚なる雅語を除きて日常必要な語を収め、其の漢字及び漢語を見出し得る様にせる點に在り。

と断り、

じやうだん 雑談、常談、諺語、戯諺、
ぜうだん 笑談、雑談、戯談、

とある。また、初版は明治二十九年に発行された、ブルンクリーの『和英大辞典』(三省堂)を、同三十二年の五版によってみると、

Jodan じやうだん 雜談 n. Sport; fun; jest; joke;
glee; gubble; plesanterie.

とある。少し溯って、文久二(1862)年、江戸開版の、『英和對譯袖珍辭書』にも、

Fun, s. 雜談、嘲哢、滑稽
Joke, s. 雜談、滑稽、ノドケ談、
Jocose, adv. 雜談シタル、
Jocosely, adv. 可笑シク面白ク、

とみえて、「じょうだん」に対する「雑談」の字列の存在を容易に証明できるのである。

資料Ⅰの、その他の用字についても、同じ表記を辞書の記事から引證する。

明治三十一年、落合直文の『ことばの泉』には、

じやうだん 名 串戲。たはむれていふ話。ふざけ。おどけ。
滑稽。

明治四十五年、山田武太郎の『大辞典』はこの時代の実況を比較的詳細に記述している。

じやうーだん(常談) 名 又、じようだん(冗談) トシ、又
ハ、串戯、ト當テル。スベテ、タハムレテ云フ言葉。○
又、スベテ、タハムレ。||フザケ。||オドケ。
じようーだん(冗談) 名 無益ナル談話。○轉ジテ、スベテた
はむれノ一稱。

また、この時期に多く編纂される対訳辞書に視界を広げると、J・
C・ヘボンの『和英語林集成』第三版(1886)に

JODAN ジャウダン 常談 n. Sport, play, jest, fun:…… (略)

とあるが、同じ記事を、初版の上海版によってみると

JŌ-DAN ジャウダン 常断 n. Sport, play, jest, fun:…
… (略)

とあって、改定時に漢字表記に手加えられているのは、誤植のため
の改竄ではなく、漢字表記の多様性を、規範に対しての許容の広
がりを示すものであろう。

さらに、幾つか拾えば、『附音挿圖英和字彙』明治六年(日就社)
では、

Jest (jest) n. 戲言、滑稽、戲弄、笑談、
Joke (jok) n. 笑談、戲言、滑稽、惡弄。

明治四十二年の井上十吉による『新釈和英辞典』には、

Jōdan. [戲談] n. A joke, a jest, a fun.

とある。

些か、冗長に過ぎたが、かくして「雑談」や「戲談」を含めて、
明治から昭和にかけての、いわゆる近代において、「じようだん」
の表記は、一回的に或いは個人的に充たされたものではない漢字
によるものであって、且、その漢字は多種におよんでいたことを證
しえた。この漢字の表記の広がりの前提に、現代とは異なる漢字彙
の広さと柔軟さがあつたと考えられるが、この表記の複雑さの起因
は、また別にあると考えるべきであらう。

そこで、資料の範囲を近世にまで拡げると、『春色梅兒譽美』七
之巻 第十三齣(1832年刊)に、

「じやうだんだヨ堪忍しな。

〔日本古典文学大系46・岩波書店〕

また、『柳髮新話浮世床』(1812年刊)には、

○柳髪新話自序

……おもひついたる趣向の一端 人の長短情譚に、通音をとりて映すは、御存の戯作者心。

○初編 巻之上

びん「熊公が床へ這入て語る時の、彦んべゑが三弦よ 亀「彦んべい、あいつはじやうだん者だ。こいつアおかしかつたらう 熊「又いふよ。又いふよ。面白くもねへ

○二編 巻之下

竹「コレもつとまけや ちやば「いくらに 竹「二百ス ちやば「そんな二百やな事を云ちやア納らねへ。じやうだんいはずに元直が六百だ、……

『日本古典文学全集47・小学館』

と、近世後期、千七百年から八百年代にかけての資料（81頁参照：資料Ⅱ 近世文学作品に見る「じようだん」）の中で「じようだん」の現れる表記は、仮名表記が主である。幾つか見える漢字によるものは、書名、書名の角書き又は序の中であって、この資料の中の本文には見えない。ただし、全く仮名専用の語であったと断定しようというのではなく、前田勇氏による『江戸語大辞典』（講談社）によると、天保七年の『廓の花笠』二中に

「ほい、これはしたり、戯談から駒が出かかつた」

と報告があつて、これによれば、漢字によつて表記されたものも存在することになる。

在することになる。

『柳多留』では全ての例が仮名書きされているが、この点について、『柳多留』初篇二篇の調査によつて、漢語・字音語のかな書きの例は意外に多いという報告を、すでに山田俊雄先生がなされているが『講座国語史2』『音韻史・文字史』『近代・現代の文字』（大修館書店・昭和四十七年））、この報告の中に掲出される、例えば、「あんどん」や「あいさつ」が、節用集の類に漢字表記による登録を見るのとは違つて、この「じやうだん」（『柳多留』の表記に従う）は節用集類に登録はなく、近世において、漢字で表記することが、もともと可能ではなかったのではないか。つまり、漢字でも表記する語を、仮名でも書く、という過程に生じた仮名表記ではなく、漢字では表記できない、仮名書きの語の仮名表記であつたのだから。この表記を手掛かりに語の使用状況を鑑みると、この語を漢語・字音語の範疇に入れることが、まず、疑わしくなる。

この疑念について、柳田国男は、文獻的な裏付けはないものの、「じようだん」は「ザファン即ち雑談から出て居る」「不幸なる芸術」「ウソと子供」（昭和三年）と直截に結び付けている。これ以前に、『言海』（明治二十四年）には、

じやうだん（名）一常談一（一）ツネノハナシ。平話。（二）

平話、雑談ノ意ヨリ轉ジテ、ザレゴト。戯レ言フ話。（或ハ、笑談ノ音カ、或ハ、雑談ノ訛カ）
「ライフ」諺語（三）又、轉ジテ、タハムレ。

オドケ。「一ラスル」戯諺

とあって、「じようだん」は漢字音の変化によって生じた語であることを臆測している。

「雑談(或いはザツダン)」との語源的な関連に直接の効力を持つものではないが、「じようだん」の出自が漢語でない点について、この語の表記の観察によって得られたこと、——つまり、近世では、(後で詳述する、十七世紀まで扱げた結果も加えても) 仮名書きが主であって、明治以降、そこに漢字が覆い被さる過程が、極めて示唆的であるといえよう。

千六百年代、近世初頭についての報告を続けると、狂言の詞章の中に「じようだん」と思われる語が幾つか拾える。『くらままいり(鞍馬参)』を大藏流虎明本、『大藏家伝之書古本能狂言』(臨川書店・昭和五十一年)によって見ると、

- (太)「今夜は宿坊へはじざらぬか
(主)「いやゆくまひ
(太)「しゆくばうへゆけは、酒をたべてよひが、またおこさう
(太)「申々
(主)「何事をいひおる
(太)「今夜ござらずは、あすじざらふと申てまいらふか
(主)「言語道断の事をいふ、しゆくばうへゆけは、茶の酒の

といふて、ざうさせらるゝがむつかしさにゆかぬ、でうだんな事、かしましういふまひ

(太)「にくさもにくし、まどおこさう、申々々

* (太)は(太郎冠者)を省略し、台詞のみを抜き出して翻字した。以下の『どんごむそう』『しろうん』も同じ。

とある、この「でうだん」は「じようだん」の用例として、既に現行の国語辞典等に登録をみるが、「じようだん」に相当するものか、証明のないところなので、敢えて、その手続きを取る。この虎明本の『くらままいり』を虎寛本「大藏流虎寛本『能狂言』中(岩波文庫・笹野堅校訂・昭和十八年七月)」によってみると、些か趣が異なるのだが、

- (主)「何事じや。
(テ)宿坊へは寄せられぬか。
(主)「いや、おもふ仔細が有るに依て、宿坊へはよるまひ。いはれぬ事を云ずとも、ねずの番をせい。
(テ)心得ました。是はいかな事。宿坊へも寄るまいと仰らるゝ。毎も宿坊へよらせらるれば、御茶の御酒のと有て、某迄も御馳走に成る。某斗り成と参うと存る。申々。
(主)「何事じや。
(テ)宿坊へは私ばかり成と参りませうか。
(主)「こゝなやつは。おのを遣れば某も行。毎も宿坊へ寄れ

ば、御茶の御酒のと有て、御馳走に成るが迷惑さに、寄まいと云事じや。云れぬ事を云ず共、寐すの番をせいで。

(主) ア。憎さも憎し、今一度おこさう。申〜。

とあって、厳密な対応にならないが、「云はれぬ」と「でうだん」とが近い関係にあるものと思われる。これは、同じ虎明本の『どんごむさう(鈍根草)』に、

(主) 「ぢやうだんをいひおる、是はおれが刀で有物を、いはれぬきつかひさせおつたな

(太) 「いやたのふだお人では御さるまひ、みやうがをこしめさぬ程に、御しつねんはごちるまひ、こなたへくだをれひ

(主) 「いはれぬ事をいひおるおこしおらふ

とあることを重ね合わせると、「でうだん」「ぢやうだん」共に、「い(云)はれぬ」に相当すると判断できよう。この「い(云)はれぬ」について、森田武博士による邦訳日葡辞書索引に恩恵を被って、邦訳日葡辞書を見ると、日葡辞書の補遺に、

+Xini. ヌニ(死に) 例, Iuarenu xiniuo suru. (謂はれぬ死にをする) 理由もなく無益な死に方をする。

とあることを知ると、「でうだん」「ぢやうだん」は、「理由もなく無益な」の意を有し、形容動詞の用法も取り込むが、「じようだん」に、ほぼ相当するといえよう。

さらに、狂言からの資料を加えると、同じ虎明本の『しろうん(宗論)』に、

(法華僧) 「南無妙法蓮華經、〜のきやうの字をきやうせんと人や思ふらん

(法華僧) 「か様に候者は、都六條あたりの者にて候、此程甲斐のみのぶへ始めて参り下向道にて御さる、急で罷上らばやと存候、まつはしゆせうなる事かな、承及たるよりも、有難き様体にて候、いまよりは毎年参らふずるとぞんずる、事じや、よひつれも御ざれかし、難談を致てのぼらふた、まつ爰元にやすんで、よからふつれもあらは同道申さうする

……(略)……

(法華僧) 「二段の者に参りあふた、路次すがらさうたん致てのぼらふ

(浄土僧) 「れいのじやうこは者にまいりあふた、路次すがらなぶらふ

……(略)……

(法華僧) 「よひからのせうだんがすぎた程に、いやまことに夜がふけた、身共もねほつけせう

(浄土僧)「やれくよひのじようだんが過て、ごやおきを忘
れうとした(略)

「難談」は虎寛本ほかとの校合で「雑談(雑談)」の誤写と見て
異はあるまい。さらに、節用集「黒本本・天正本・饅頭屋本ほか」
の「雑談」の登録を仲立ちにすると、「雑談」の誤写の「難談」も、
また、この内容を受けて続く「ぞうたん」も、第三音は清音のまま
で、共に「雑談」と判断できる。しかし、後半に見える、内容上か
ら同義と見做せる「ぜうだん」と「じようだん」を、「ぞうたん/
雑談」と同じ語と判断できようか。(但、虎寛本(岩波文庫)・山本
東書写本(古典大系本)では、「ぜうだん」に該当する部分を「雑
談」に作る。「じようだん」は対応する記述部分はない。)

「ぜう」と「じよう」を同音と断じること大過なからうが、「ぞ
う」とは「線を画する。また、「ぞうたん(雑談)」は、後に「ぞう
だん」と第三音が濁音に変化するが、これを確認できるのは、十九
世紀初頭であって、この部分でも混同されない。「ぜうだん」も「じ
ようだん」も「じようだん」であって、「ぞうたん」でない。ここ
に挙げる狂言の資料は、最も早い虎明本でも寛永十九年の書写であ
って、四つ仮名の混同以降のものであるから、「くらままいり」の
「でうだん」及び『どんごむそう』の「ぢやうだん」は、その表音
表記から帰納されるどころも、また、意義の上でも、「ぜうだん」・
「じようだん」と同一であると思做せらるであらう。しかし、狂言
に見える、十七世紀の、「じようだん」の表記は、漢字によらず、

仮名によるもので、その使用された文字の機能、つまり仮名の、文
字としての機能が表音的な性質であるにも拘らず、幾つかの変形
(ヴァリエーション)が見られるという、表記された語形の特徴を
示す言語的事実が得られた。仮名表記の変形(ヴァリエーショ
ン)が、発音としての語形を直截に表わすとはいえないが、発音
と、文字としての具現化された語形との間に一対一の以上の複雑な対
応があることは事実である。また、仮名表記であることが、この語
の語種、つまり、漢語か否かを示すものでもないが、「じようだん」
が元来いわゆる漢字語でなかったことも、この表記の史の変遷によ
って示唆されることである。

一方、「雑談/ぞうたん」のついて、亀井孝先生・佐竹昭広先生
には既に言及なさるところであるが、先に述べたごとく、節用集
に、又、吾妻鏡や太平記にも見え、漢字表記の由来は古く、下って
「ぞうだん」「ぞうだん」と語形を変えても漢字表記は保たれる。
意味について考えると、今は、変遷を辿る余裕はないが、再び、同
じ手続きで、日葡辞書に拠ってみると、その補遺に

Latian. ザンタン(雑談)『また、本来の正しい意味ではな
いが、からかいひやかす言葉の意。文書語。』

とあることから、「ぞうたん(雑談)」は「ひやかしからかう」意を
含んでいた。そして、時代が下って、近世後期になっても、

あるとき頓白の弟子ども打こぞりて。さま／＼の雑談男女の中
の戯ればなしに。孫太郎いふやう。……

『世の中貧福論 後篇』文政五年版・十返舎一九著
(古典文庫四六四冊・翻刻本・昭和60年)

の如く、部分的に「ひやかし」とか「からかう」という意味を持
ち続ける。

このことは、現代方言の中に遺る、

ぞーたん【雑談】①戯れに言うこと。冗談。島根県大田市 725 山

口県豊浦郡「ぞーたんいうな」 798 愛媛県 840

長崎県 898 香岐島 914 熊本県 921 (ぞーだ

ん) 島根県瀬摩郡 732 長崎県南高来郡 904

②戯れること。いたずら。悪ふざけ。福岡県

881 佐賀県 887 長崎県 906 (以下略)

『日本方言大辞典』(小学館・一九八九年一月)

と深く関わり合うものであろう。その上で、「じょうだん」に引き
較べると、語義の上でも、また、発音によって期待される語形も、
「じょうだん」が文献に見える時期から、既に接近した関係であつ
たが、表記の面では、仮名を専らとする、仮名表記の語と、漢字に
よって記される、漢字語と、歴然とした違いがあった。

以上、「じょうだん」をめぐる、語の変遷を考察しながら、漢
語「冗談」の形成される過程を報告した。ここで言い得たことは、
「じょうだん(冗談)」が近世に於いては、仮名表記の語であつて、
近世末から明治期以後に漢字が充當されるということのみである。
この事は、この語の出自を証明するものではないから、漢語か否か
について結論を提出することはできない。但し、純粹な漢語とも、
また、和語とも言いえない、漢字音に近い語形を持ったもの、――
浜田敦氏のいう「音相」を持った語が、漢字語の性質を備え、漢語
に形成される、その一例が、広義の漢語の中に、存在することを明
かにした。併せて、方法論の上では、表記の通時的考察が、語史の
研究に寄与することを明かした。

* 本稿は平成七年十一月十八日成城国文学会冬期大会における
口述発表の補助に配布した要旨に若干の手を入れたものであ
る。

◇太宰治

◇芥川龍之介

◇志賀直哉

◇夏目漱石*

◇森鷗外

『ヴィヨンの妻』	〔昭22〕	冗談△7▽			
『人間失格』	〔昭23〕	冗談△10▽			
『晩年』	〔昭11〕	冗談△8▽			
『歯車』	〔昭2〕		常談△1▽		
『唇気楼』	〔昭2〕		常談△1▽		
『河童』	〔昭2〕		常談△4▽		
『海のほとり』	〔大14〕		常談△1▽		
『雛』	〔大12〕	冗談△1▽			
『秋』	〔大9〕	冗談△2▽			
『戯作三昧』	〔大6〕	冗談△2▽	串戯△6▽	笑談△3▽	
『暗夜行路』後	〔昭3〕	冗談△1▽	串戯△2▽	笑談△4▽	
前	〔大10〕		串戯△1▽	笑談△2▽	
『和解』	〔大6〕		串戯△1▽	笑談△1▽	
『赤西蠣太の恋』	〔大6〕		串戯△1▽	笑談△1▽	
『正義派』	〔大1〕	冗談△1▽	冗談半分△2▽	笑談△5▽	
『濁つた頭』	〔大4〕	冗談△1▽			
『ころろ』	〔大3〕	冗談△1▽			
『行人』	〔明45〕	冗談△13▽	冗談△1▽		
『彼岸過迄』	〔明45〕	冗談△4▽			
『坊っちゃん』	〔明39〕	冗談△4▽			
『雁』	〔明45〕			笑談△4▽	
『青年』	〔明43〕			笑談△2▽	
			戯談△1▽		
			雑談△1▽		

◇二葉亭四迷

『中タ・セクスアリス』 [明42]
『新編浮雲』 [明20]

笑談へ3

戯談へ7
戯談へ2
情談へ2

*補注：夏目漱石の作品については、今次『漱石全集』（岩波書店）を用いたが、編集部によって施されたルビを削除して示した。つまり、ここに見えるルビは漱石の原稿にあるものである。但し、複数用例がある場合、総てについてルビがあるものとは限らない。

資料Ⅱ 近世文学作品に見る「じやうだん」（1700～1900）

※『柳多留』を除いては全て一例を見るのみ

◇並木千柳ほか

『夏祭浪花鑑』 延享二年

ぢやうだん

◇永井堂亀友

『笑談医者質氣』 安永三年

笑談〔卷二以下の内題〕

▼卷一の内題は「名醫戯笑晰 卷之一」

◇立川談洲樓焉馬

『無事志有意』 寛政十年

ぜうだん〔三升鶴女作「そゝか」〕

◇十返舎一九

『串戯しつこなし』 文化二年

串戯〔序〕 滑稽〔序〕

『東海道中膝栗毛』 文化六年

じやうだん〔序〕

『六あみだ詣』 文化七年

串戯〔跋〕

『串戯二日酔』 文化八年

串戯〔序／跋〕

『雑談紙屑籠』 文政三年

雑談紙屑籠〔序〕

『浮世風呂』 文化十年

じやうだん

『柳髪新話浮世床』 文化十一年

じやうだん

『春色梅兒譽美』 天保四年

情譚〔序〕

◇為永春水

『春色梅兒譽美』 天保四年

じやうだん

◆川柳

『誹風柳多留』

明和二年〜天保九年

じやうだん じようだん

じやうだんをしいく捨る鳥のはね
 じやうだんに談義などきく花戻り
 じやうだんにだんぎなと聞花戻り
 じやうだんにうばたきついでいやからせ
 じやうだんのやうにたんすやびやうを打
 じやうだんにのませて姫はくつつかれ
 じやうだんに堀の持佛のりんを打
 じやうだんな堀のみそなどすつてみる
 じやうだんにしても鼎ハこわひ物
 じやうだんな天狗は鼻でくちつてる
 じやうだんのやうな天窓を寺で刺り

〔五・4〕
 〔六・16〕
 〔九・35〕
 〔一七・36〕
 〔十九・18〕
 〔二〇・10〕
 〔二二・21〕
 〔三一・16〕
 〔五六・25〕
 〔一〇一・7〕
 〔別・下・7〕

【出典一覽】

◇太宰治

▽『ヴィヨンの妻』

▽『晩年』

▽『人間失格』

◇芥川龍之介

▽『全作品』

◇志賀直哉

太宰治全集・筑摩書房・昭和51年発行

砂子屋書房・昭和11年発行

(名著復刻全集近代文学館・昭和44年による)

太宰治全集・筑摩書房・昭和51年発行

芥川龍之介全集・岩波書店・昭和53年発行

▽全作品(除『暗夜行路』)

▽『濁つた頭』

▽『暗夜行路』

◇夏目漱石

▽『全作品』

志賀直哉全集・岩波書店・昭和48年発行

初期白樺派文學集(明治文學全集76)・筑摩書房

・昭和48年発行も参照した

座右寶刊行会・昭和18年発行

(名著復刻全集近代文学館・昭和44年による)

漱石全集・岩波書店・平成5年(刊行中)

名著復刻漱石文学館・昭和51年も参照した

◇森鷗外

▽『全作品』 鷗外全集・岩波書店・昭和50年発行

◇坪内雄蔵

▽『新編浮雲』 東京金港堂・明治20年発行

(名著復刻全集・近代文学館・昭和43年による)

◇並木千柳・三好松落・竹田小出雲

▽『夏祭浪花鑑』 延享二年(日本古典文学大系51『浄瑠璃集上』

・岩波書店)

◇永井堂亀友

▽『笑談医者質氣』 安永三年 国会図書館蔵本

◇立川談洲樓焉馬

▽『無事志有意』 寛政十年(日本古典文学大系100『江戸笑話

集』・岩波書店)

◇十返舎一九

▽『串戯しつこなし』 文化二年/文化三年/文政十二年

(二本とも国会図書館蔵本)

▽『東海道中膝栗毛』

浪花書林 河内屋太助ほか・文化六年

▽『六あみだ詣』

(日本古典文学大系62・岩波書店)

▽『串戯二日酔』

江戸書房 鶴屋金助版・文化七年

▽『世中貧福論』

(古典文庫第四三冊・昭和56年・翻刻本)

▽『雑談紙屑籠』

書林 永寿堂西村與八版・文化八年

(古典文庫第四六四冊・昭和60年・翻刻本)

東都 書物問屋 角丸屋甚助蔵・文化九年

(古典文庫第四六四冊・昭和60年・翻刻本)

双鶴堂鶴屋金助・文政三年

▽『反古張障子』

双鶴堂鶴屋金助・文政五年

◇式亭三馬

▽『浮世風呂』

(古典文庫第四八六冊・昭和62年・翻刻本)

▽『柳絮新話浮世床』

江戸書鋪 西村源六 石渡利助 文化十年

(日本古典文学大系63・岩波書店)

◆『誹風柳多留』

江戸書肆 鶴屋金助 柏屋半蔵・文化十一年

◆『誹風柳多留全集』

(日本古典文学全集47・小学館)

▽『誹風柳多留全集』

岡田甫校訂(三省堂・昭和51年初版)

◆狂言

▽大藏虎明本

『大藏伝家之書古本能狂言』(臨川書店・昭和51年)

▽大藏虎清本

大藏虎清自筆狂言八番(国語国文学研究史大成8謡

▽大藏虎寛本

曲狂言・三省堂・昭和36年)

▽大藏流山本東書亭本

『能狂言』(岩波文庫・笹野堅校訂・昭和17年)

▽大藏流山本東書亭本

『狂言集』下(日本古典文学大系43・岩波書

◆キリシタン文獻

▽日葡辞書

邦訳日葡辞書 邦訳日葡辞書索引(岩波書店)

(成城大学大学院博士課程後期)